

報告4 信州の中世城館と聖地・寺院

河西 克 造
(長野県埋蔵文化財センター)

1. 松本平の城郭変遷と特徴的な防御施設

(1) 松本平の中世城館、その変遷

	第1段階 14世紀?~	第2段階 15世紀中頃~	第3段階 16世紀中頃~	第4段階 16世紀後半~	第5段階 16世紀末
築城主体者	小笠原氏 (内紛)	→→→→ 小笠原長時 (前期小笠原)	→→ 武田信玄	→→ 小笠原貞慶 (後期小笠原)	→→ 石川数正
本拠	井川城—林館 林城?	林城 (林山腰遺跡)	深志城	林城—深志城	松本城
	中世の館(屋敷)・中世城郭(山城)				近世城郭
	館(屋敷)	山城	平地城郭	山城	平地城郭 平地城郭

(2) 山城、特徴的な防御施設

①主郭の縁辺などに施された石積み

基本的に信州の山城は石積みを多用しないが、山城が密集(発達)する善光寺平、松本平、上田盆地、諏訪盆地もしくはそれと隣接する地域に分布する山城のなかには、防御の要点もしくは視覚的要素を目的とした場所に石積みが施されている。

松本平に分布する山城の最終段階は小笠原貞慶(後期小笠原)段階。林大城、桐原城、山家城など、特に薄川流域の山城に見られる布積みの石積みは、小笠原貞慶段階に構築されたものと推定される。縄張り論の視点では、山家城に2者(武田氏と小笠原氏)の築城主体者の存在が指摘されている(三島正之氏の指摘)。

↓

松本平の山城に見られる布積みの石積みは・・・

→石積み構築技術の伝播か。松本平には小笠原氏段階以前に、石積みが発達していた。

→信州では筑北村青柳城など武田氏滅亡後の山城に存在。布積みの石積みの出現期と石積みを多用する築城主体者の存在(小笠原貞慶、上杉景勝など)。

→築城時の普請で石が産出されたためか。山から石が多く採れたため。

(例、上田市松尾城)

②尾根の頂から中腹まで延びる長大な豎堀

布積みの石積み同様、小笠原貞慶(後期小笠原)段階の所産。林大城と甲斐の要害山城との縄張りの共通性。

2. 県内における中世城郭の時代性

(1) 中世前半(南北朝時代~室町時代(前半))の防御施設(要害)【中世城郭の発生】

①南北朝時代の城郭

清滝(長野市): 建武2年(1336)、市河助房の代官を勤める若党の難波助元は、北条氏と党らが籠城する埴科郡英多荘清滝城を攻撃する(『市河助房代難波助元軍忠状』『市河文書』)。地表面観察で、清滝には城郭施設は確認されない。

②室町時代(前半)の城郭

春山城(長野市): 応安3年(1370)、藤井全切の代官上遠野政行は、南朝勢力と高井郡春山城に籠城し、反幕府軍と戦う(『上遠野文書』)

大塔要害(長野市)・塩崎城(長野市)・塩崎新城(長野市)

応永7年(1400)、信濃守護小笠原長秀と長秀の信濃入部に抵抗した国人衆(大文字一揆)が衝突した大塔合戦に登場(『大塔物語』)

小笠原長秀は「大塔要害」に籠城。

塩崎新城(長野市)・桐原要害(長野市)・若槻要害(長野市)

応永10年(1403)、幕府代官細川慈忠は更科郡塩崎新城、水内郡桐原・若槻の要害を攻撃(『市河文書』)

↓

南北朝時代~室町時代(前半)の城郭は、合戦時のみ短期的(臨時的)に使われた防御施設(典型例が陣城)。

城郭は、清滝(観音)や岩が露出する春山城のように、聖地であったことを想像させる場所にある。このような場所を「要害」として利用したことが中世城郭の発生。出現期の城郭は、基本的に曲輪・堀・切岸などの防御施設が構築されていない(要害=聖地)。

(2) 中世後半(室町時代(後半)~戦国時代)の防御施設(中世城郭)。

【中世城郭の展開】

①中世城郭(恒常的な防御施設)の形成

曲輪、土塁、切岸、堀を構築し、城兵が仮居住もしくは居住できる施設。この「中世

城郭」は、京で勃発し、ほぼ日本列島全域に「争乱」の渦に巻きこんだ「応仁の乱」（応仁元年・1467）頃を契機に出現・展開したとされている。

県内で発掘された中世城郭は、大半が中世（15世紀後半）以降のものである。

中世の文献史料（文書）を見ると、15世紀後半の文書に城郭名が散見され、16世紀前半～中頃に最も多く登場する。また、武田信玄が信濃に侵攻した天文11年（1542）以降は、城郭の改修が顕著となる。



県内の中世城郭は、15世紀以降に形成されたと理解できる。

②中世城郭を築城する「場」

中世城郭は、戦国大名もしくは国人領主（国衆）の支配領域内において、どのような「場」に築城したか。

【神之峯城跡（飯田市）の例】

天竜川の東側（竜東地域）、玉川左岸にある独立丘陵にあり、武田信玄が下伊那に侵攻する以前、竜東地域を支配した知久氏の本城とされている城郭。知久氏の神之峯城入城時期を示す文献史料は確認されていないが、地元研究者によると16世紀初頭に入城したと推測されている。

神之峯城は独立丘陵の頂に本丸、二の丸などの曲輪群（主郭部）がある。この頂の最高所には巨石が露出しており、磐座を想像させる様相を呈する。ここには現在久堅神社が鎮座する。本丸は最高所より一段下がった場所にある。山城の場合、一般的には立地する尾根もしくは丘陵の最高所に主郭が構築されており、神之峯城は様相を異にする。



神之峯城は頂の最高所（巨石）に手を加えずに築城。知久氏は信仰の対象であった場所（神之峯）に城郭を築城。築城以前に存在した信仰ネットワークを取り込むため、築城主体者はそこに築城。城郭を築城する「場」は限定されていた。

3. 県内の城郭遺跡、その構造

(1) 主郭部がある城郭

山頂もしくは尾根の頂に主郭があり、主郭周囲に曲輪群とそれを防御する堀切等が構築される。ピラミッド構造の城郭で、普遍的な城郭。

(2) 主郭部がない遺跡

谷の中に平坦地が階段状に配置し、その姿は雛壇を想像する様相を示す。しかし、谷

を囲む尾根上だけでなく、尾根の頂に曲輪がない。主郭や尾根上の曲輪群がなく、谷の中だけに平坦地が展開。典型例は上田市塩田城跡で、酷似する事例として松本市林山腰遺跡がある。このような遺跡を城郭として捉えることは困難。

雛壇状の平坦地の存在→山林寺院の可能性はないか。

4. 信濃の守護所

(1) 政治動向と守護所比定地

信濃国の守護所として、文献史料では「船山守護所」と「平芝守護所」の2箇所の存在が確認される。前者は建武2年（1335）年と観応2年（1351）年、後者は至徳4年（1387）の文献に登場し、両者とも南北朝の内乱期に存続したものである。守護所は応安3年（1370）頃に船山から約16km北方にある平芝に移転している。

「平芝」・「船山」とも守護所の位置は特定されておらず、地名や地籍図などから推定されているのにすぎない。比定地は宅地化が進み土塁・堀跡などの痕跡を確認することはできないため、現状で規模と構造を把握することは不可能である。今後の発掘調査で得られる考古資料によって位置・規模・構造などが明らかとなり、研究が進展するものと思われる。

「船山守護所」と「平芝守護所」の位置が特定されていない要因には、信濃の政治動向が深く関係していると思われる。北条氏滅亡以降の信濃は、中先代の乱など幕府方と鎌倉府の対立（抗争）の舞台となっており、さらに国人との衝突など著しく不安定な状況のなかで守護はめまぐるしく交代している。一時期、幕府料国となり代官が入部している。

かかる動向のなか、政務を執行する場所（守護所）を一町または二町四方規模で設け、政務を実質的に執行できたであろうか。

地籍図では平芝守護所に比定されている中御所と船山守護所に比定されている小船山地籍で館プランが判読される。位置に不確定要素が多分に含まれていることから、これを即守護所と認識することはできない。仮に守護所と判断したとしても、両遺跡とも約半町を単位とした規模で、守護所として認識されている規模・形状と異なる。

東国信濃の守護所については、2つのことが考えられる。まず第1は、方形プランとして守護所が設けられていたとすると半町四方の規模であったと考えられる。第2は、

応永7年(1400)守護小笠原長秀が善光寺で政務を執行していることから、特に守護所として設けることなく、既存の城郭(館)もしくは善光寺を利用したことが推定できる。守護所は各地域で定型的な形として見られるのではなく、その機能や役割によって形が変わっているものと考えられる。

南北朝期以降の守護所は、その存在すら全く確認することができない。室町期の守護は小笠原氏であるが、小笠原氏は守護としての政務をほとんど執行していない。さらに守護と国人との抗争、小笠原氏一族の内紛(二派に分裂)、国人相互の争いなど絶え間なく起こっており、守護大名として成長したものはなかった。国人などが分立状態のまま戦国時代を迎えており、在地勢力の強い信濃の中世史を物語っている。内紛の末、府中(現松本市)小笠原氏が統一した。したがって、武田信玄が信濃守護になる永禄2年(1559)までの守護小笠原氏の本拠地(井川城と林城)を守護所として見ることもできようが、館の位置が特定できていないため、推測(解釈)の域を脱しない。

信濃守護所が不明確な理由は、信濃特有の複雑な政治動向のなかにあって、幕府権力が守護一守護代という形で充分浸透しなかったことに原因があると思われる。そのため定型的な形としての守護所を設けることが不可能、もしくは必要がなかったと考えることができよう。

5. 「土木考古学」の視角

中世城郭の構成要素

- ・地山を掘削し、そこで発生した土を造成して曲輪を形成
- ・土を盛り上げて土塁を構築
- ・尾根を遮断する堀切は地山を掘削して構築
- ・石を切り出し、運搬して石積みを構築



発掘調査で算出される盛土・切土の量から、普請(土木作業)の規模が推定される。城郭の発掘調査では、遺構・遺物だけではなく、土木作業量を算出するための記録が必要。→土木考古学の発展に寄与。

中世城郭の築城は民衆を動員した大土木工事であることが明らかとなりつつある。

【主な参考文献】

- 河西克造 2002 「信濃における戦国大名の築城様相—武田氏と上杉氏築城の城郭について—」『織豊城郭』第9号 織豊期城郭研究会
- 河西克造、市川隆之 2003 「中世の城館跡」『長野市誌』第12巻 資料編原始・古代・中世 長野市誌編さん委員会
- 守護所シンポジウム@岐阜研究会 2004 『守護所・戦国城下町を考える』シンポジウム資料集 第12回東海考古学フォーラム 岐阜大会
- 中澤克昭 1999 『中世の武力と城郭』吉川弘文館
- 長野県教育委員会 1998 『長野県の中世城館跡—分布調査報告書—』
- 松本市 1993 『松本市史』第2巻 歴史編I 原始・古代・中世
- 三島正之 1998 「小笠原領域の山城と武田氏」『中世城郭研究』第2号 中世城郭研究会

【メモ】